

一人ひとりの発達段階をふまえた指導のあり方

～自立をふまえて（どの子ども共に生き、共に育つ）～

I. 研究の内容

1. 小部会別の授業実践

山梨市知的障害部会，甲州市知的障害部会，情緒障害部会の3部会に分かれて事前に4回の小部会別研究を実施，教材研究や指導案作りを行った。

(1) 「粘土あそびをしよう」・・・授業者 飯島和雄先生（山梨小）

講師 かえで養護学校 望月 公先生

学年や実態が異なる3人の児童と一緒に学習する時間をとったことにより，以前より3人の関わりが見られるようになった。このような小集団の学習での一人ひとりのねらいの立て方，支援上の留意点，場の設定，粘土を扱う際の授業の進め方，本時の展開など細部にわたり討議がなされ，学習することができた。

(2) 「すみれとあり」・・・授業者 深澤恵子先生（東雲小）

講師 大里小教頭 古屋けさよ先生

児童の実態に合わせた興味のある教材を使用し，ワークシートを使って自分で考える学習を設定したことで，集中して学習に取り組むことができた。研究会では，目標，障害の特性，語彙力を高める手だて（体全体を使っての動作化・絵や写真の掲示，ゲームやクイズなど），学習環境，振り返りカード，学習記録，新担任への引き継ぎ（個別の指導計画・個別の教育支援計画の作成と活用）などについて討議がなされ，特に初めて担任した教師にとっては，大変参考となった。

(3) 「ぼくが調べた点字」発表会をしよう・・・新谷雅美先生（加納岩小）

講師 特別支援教育指導主事 中込香代子先生

「点字」についての調べ学習と本児の興味のある事柄を結び付けたことにより，長い単元であったが，意欲を持ち続けることができた。研究会では，工夫されたプリントや資料は，通常学級の児童にとっても効果的であったため，今後も教材の共有を続けることが望ましいこと，まとめの発表を見通しを持って通常学級でも行い，友達から褒めてもらえたことで今後の自信につながったこと，情緒障害学級では「国語」の中でも情緒の安定や自立的な活動を意図した内容を意識して仕組み，体験を通しながら社会性を身に付けさせることが大切であることなどが確認された。

2. 学習会

(1) 「軽度発達障害児に対する校内支援について」

講師 教育センター研修主事 岡 輝彦先生

(2) 「個別の教育支援計画について」

講師 特別支援教育指導主事 土肥 満先生

個々に校内で実践したことや個別の教育支援計画について振り返ることができた。また、細かな疑問点についても確認でき大変有意義だった。

3. 情報交換 (資料提供・お薦めの本・実践報告など)

II. 成果と課題

1. 成果

- ・ 3つの小部会別研究による授業実践，校内支援体制の実践報告（全員），各校の資料提供などにより各自が自分なりの視点を持ち前向きに研究に参加できた。
- ・ 3つの授業実践は，児童の特性を生かし細やかな配慮がされた授業で多くの事が学べ研究テーマにせまることができた。専門的な立場からの講師の助言も普通の授業を考える上で大変参考になった。
- ・ 学習会は，それぞれが実践した後だったのでより課題が明確になった。

2. 課題

- ・ 全員が提案することで，個人の意識は高まるが時間に余裕が無くなる。
- ・ 本部会に期待することが，個々で違うため内容が盛り沢山になりがちである。授業実践以外は，内容を絞り深めていくことも必要である。

III. 成果物

ふり返しカード

年 組 名 前 ()

今日のやくそくについて

やくそく

はんせい



今日の発表会の感想を書きましょう。

--

ふり返しカード

なまえ ()

時	月	学しゅう	かんそう
	日	とりくみのようす	
1	/	☺ ☺ ☹	
2	/	☺ ☺ ☹	
3	/	☺ ☺ ☹	
9	/	☺ ☺ ☹	

☺ たのしくさんかできた。

☺ まあまあできた。

☹ あまり，とりくみができなかつた。

(部長 荻原 陽子)